

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第10話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ：騎士団長

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノ皇女

カイン（25）：ヌノ皇太子

ギル皇帝（50）：ヌノ皇帝

シャーニューニダ：魔族

ニユンリン：魔族

嵐宮芽里：夕杜王女

浮世心愛：コリウス・ヴァリス

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア

王女

オパピア（25）：社長令嬢

タールク（28）：宵闇騎士

ジャンキサス（40）：ポストゼラン

ガロニア国王

ゲドーナ：ゲドン族首領

ヒュール：魔族

○ラフドナ城・王室

カイン（25）、ギル皇帝（50）から報告を受ける。

カイン「よかった、無罪になったんだな」

ギル皇帝「ああ。ルチェリールタが助かったのなら、わしらの行動は1つ。ジョゴニユ・ロッシ様の意思に必ず応えるのじゃ」

2人、向かい合って同時にうなづく。

○闘技場・屋外

空から降って来たいくつもの雷が、闘技場リングに降り注ぐ。

それがタールク、ルチェリールタ、ニユンリンを打ち付ける。

ルチェリールタ「ぎやあああああああ！」

タールク「ぐあああああっ！」

ニユンリン「あああああっ！」

3人、苦しみの叫び声をあげる。

涙を浮かべているルチェリールタの目が、ゆっくりと閉じていく。

○

チビイの声「ルチェリールタ！」

シャーザベスラの声「起きろ！」

意識を失ったルチェリールタを起こそうとする、いくつもの声。

○病院・病室（朝）

ベッドに仰向けになっているルチェリ

ールタ、目をさます。

チビイ「お、起きたぜ！」

シャーザベスラ「本当か！」

シャーザベスラとチビイ、ルチェリー

ルタを見下ろしている。

嵐宮芽里、浮世心愛、シャーニユーニ

ダ、オパピア、タールクが、ルチェリ

ールタの方を向く。

ルチェリールタ「み、んな……」

タールク「起きたか」

ルチェリールタ「け、決闘、は……」

意識がぼやぼやする中、声を絞り出す。

タールク「突如、闘技場に謎の雷が落ちると
いう未知のトラブルに見舞われ、中断に。
念のため言っておきますが、私の雷ではな
いです」

淡々と説明するタールク。

タールク「ルチェリールタさん。あの時、未
知の攻撃から決闘参加者を守るために飛び
出したんですよ」

ルチェリールタ「え？ ああ……まあ」

ゆつくりと頷く。

ルチェリールタM「なんか勘違いされてる、
助かった」

タールク「感謝します。それでは、これにて
失礼します。ニュンリンが治療され次第決
闘を行いますので、準備のほどをお願いし
ます」

タールク、ルチェリールタに騎士の礼
をし、部屋を出る。

ルチェリールタ「え……」

ルチェリールタ、ゆつくりと芽里と心
愛の方を向く。

ゆつくりと立ち上がるルチェリールタ。

ルチェリールタ「な、なんで2人が。あれ：

…ニユンリンは？」

ルチェリールタの意識が鮮明になる。

チビイ「（暗い声で）さすがルチェリールタ、

回復が早いな……」

隣のベッドを見ると、医療機械につなが
がれている重症のニユンリンがルチェ
リールタの瞳に映る。

ルチェリールタ、顔面蒼白になり、

ルチェリールタ「ニユンリン？ う、嘘だよ

ね……？」

涙を浮かべながら隣のベッドのそばに
移動し、ニユンリンを見下ろす。布団
が勢いよく宙を舞う。

ルチェリールタ「ニユンリン……ニユンリン

！ ねえってば！ 返事してよ！」

ベッドに大粒の涙が落ちる。

ルチェリールタ「あああああああ！」

ニュンリンのベッドに突っ伏して大声

で泣きじゃくるルチェリールタ。

泣きながら治癒魔法を発動している。

それを見て、心愛が申し訳なさそうに

視線を逸らす。

心愛「すまぬ……あの雷はわらわなのじゃ」

○（回想）空

芽里、コリウス・ヴァリス（心愛）の

背中に乗って闘技場を見下ろす。

コリウス・ヴァリス「占い師の言葉を覚えて

おるか」

芽里「ええ。魔族の仲間が決闘で殺されそう

になるから助けよ、と。だからこうして急

いで戻って来た」

コリウス・ヴァリス「じゃがこの状況……」

コリウス・ヴァリス、手に雷を集めて

いく。

（回想終わり）

○病院・病室（朝）

心愛「事前に聞いておったから、見ただけで状況を察せた。あの状況で相手だけを攻撃すれば、ニユンリンの仲間だと疑われニユンリンが負けになる可能性があった……じやから、すまぬ」

心愛。申し訳なさそうな顔をしている。

芽里「あの方を攻撃しなければ、ニユンリンさんは死んでいました。とはいえ……ルチエリールタさんには申し訳ないことをしました」

芽里と心愛、ルチエリールタに頭を下げる。

シャーザベスラ「僕からも謝るよ……決闘を提案したのは僕なんだ」

シャーザベスラ、申し訳なさそうな表情でルチエリールタを見つめる。

シャーザベスラ「君たちなら勝てる、と高にくくっていた。君たちに、こんなにもつら

い思いをさせることになるなんて」

2 人に続き、シャーザベスラも頭を下げる。

シャーザベスラ「政略結婚の時からそうだった……僕は君に苦しい思いをさせてきたんだ……君を僕たちの都合で振り回したんだ……本当にごめん……！」

シャーザベスラ、涙を浮かべる。

ルチェリールタ「……」

ルチェリールタ、うつぶせのまま沈黙している。

シャーニューニダ「……そこまでニユンリンに固執する理由はなんだ？ 負けたニユンリンにそれほどの価値はあるのか？」

シャーニューニダ、口を開く。

シャーザベスラ「お、お前！ ちょっとはルチェリールタの気持ちを考えろ！ 大切な仲間だろうが！」

叫び、シャーニューニダの胸ぐらを掴む。

シャーザベスラ「僕は一国の皇女として、みんなよりルチェリールタをいっぱい見てきたからわかる。ルチェリールタは、誰よりも優しい騎士なんだ！ そんなルチェリールタの、誰かを思い気遣う心が間違ってるって言うのか！？」

目からあふれた涙が床に落ちる。

シャーザベスラ「今まで、誰よりも人のために頑張ってきた。それがラフドナ騎士団長、ルチェリールタだ。少しくらい……わがまま言わせてやってくれ」

と、ぼろぼろ涙を流して泣きながら、拳をきゅつと握る。

シャーニューニダ「……すまない、余計だった」

シャーニューニダ、病室から出る。

シャーザベスラ、掴んだ胸ぐらを離す。

オパピア「タールク……」

オパピア、悲しそうな顔をする。

○同・廊下（夜）

別の日。

ルチェリールタ「ニユンリン……」

ルチェリールタ、ニユンリンがいる部屋の前

に立つ。

ゆっくり扉を開け、中に入る。

職員A「この人、毎日お見舞いに来てるわねえ」

職員B「そうね。毎日通って……あの報道、本当に本当なのかな？　なんか、こうも献身的なのを見てると報道が間違ってたんじゃないかって思う……なんて、大々的には言えないけど」

立ち話をしている職員。

○同・病室（夜）

ルチェリールタ「ニユンリン……ずっと起きないね。もう3カ月も経った」

ルチェリールタ、ベッドのニユンリンを悲しそうな目で見つめる。

ルチェリールタ「起きてよ……」

布団をぎゅっと掴む。

ニユンリン「……う」

ルチェリールタ「ニユンリン！？　ねえニユ

ンリン！」

ルチェリールタ、大きく目を見開く。

ニユンリン「あ……ルチェリールタ……」

ルチェリールタ「ニユンリンっ！　よかった

あ……よかったよおおおおおお

ルチェリールタのうれし泣きでベッド

が濡れる。

ニユンリン「ねえ、どう、なったの？」

ルチェリールタ「えっと」

ルチェリールタ、事の顛末を話す。

ニユンリン「そ、つか。かんしゃ、し、ない

とね。ここあさ、んに！　こほっ、こほっ

！」

ルチェリールタ「安静にして！　って、こん

なにうるさいのがいたらだめか」

ニユンリン「い、いい、よ」

ルチェリールタ「えへへ」

涙を浮かべながら笑うルチェリールタ。

ルチェリールタ「あ。ニュンリンにアドバイスがあるの。ニュンリンなら絶対できるから」

ニュンリン「決闘のアドバイス？」

ルチェリールタ「そう。それはね」

○闘技場・屋外

たくさんの人が、闘技場のリングを見ている。

ルチェリールタ「今度こそ、勝って……！」

ジャンキサス（40）「ではこれより、ニュンリン対タールクの決闘を始める！」

ニュンリン「……」

ニュンリン、つばをぐくりと飲み込む。

ニュンリン「絶対に、勝つんだ……」

ジャンキサス「それでは……」

ジャンキサス、大きく息を吸い、

ジャンキサス「はじめ！」

決闘開始を宣言。

タールク「プリマダンケの誇りに誓い……私が勝つ！」

タールク、レイピアを構える。

レイピアに雷がまとわれていく。

タールク「覚悟！ はあっ！」

ニュンリン「負けない！」

ニュンリン、糸を出して防御。

稲妻がバチバチとリングに飛び散る。

ニュンリン「あーしは……ルチェリールタのために勝たなきゃいけないんだ！」

ニュンリン、大量の糸を出す。

そこから、数分間の激しい戦闘。

ニュンリン「この決闘は、細かい素行を見られて……毒は使わない！ 魔族態にもならない！ もう迷わない！」

大声で、決心を叫ぶ。

ルチェリールタ「ニュンリン、がんばって……！」

タールク「それで私に勝てるのか？」

ニユンリン「あの時、ルチェリールタの言葉を気にしてやられた……ルチェリールタには申し訳ないけどそれが事実。だけど」

ニユンリン、タールクをキツと見つめる。

ニユンリン「ルチェリールタは正しかった！

正しい心があれば、あーしは誰よりも優しい魔族になる！」

大量の糸をタールクに向かって飛ばす。

ニユンリン「誰も傷つけない方法で……勝つてみせる！」

タールク、それを剣で迎撃。

タールク「……」

ニユンリン「ルチェリールタが教えてくれた

こと……無駄にはしないッ！」

ニユンリン、さらに糸を増やす。それがタールクに向かって伸びていく。

タールク「！」

タールク、糸に捕まる。

○（回想）病院・病室

ニユンリン「決闘のアドバイス？」

ルチェリールタ「そう。それはね、糸を使うの。そうすれば、誰も傷つけずにタールクを降参させられる悪い印象がつかないと思う。だけど」

ルチェリールタ、一瞬間を開け、

ルチェリールタ「詳しくは運営しか知らないだろうから、勘なの。だから、自分が正しいと信じた方法で闘って」

ニユンリンの手を取る。

ルチェリールタ「優しく強くなれるって信じてる。ついてきてくれたら……嬉しいな」

ルチェリールタ、にっこりと笑う。

（回想終わり）

○闘技場・屋外

ニユンリン「捕縛！」

タールクの体に糸が巻きつく。ニユンリン、タールクをじっと見据える。

タールク「ふっ。まさか宣言通り負けるとは。

こんな魔族が、極悪非道なわけがなかった

……」

ニユンリン「それじゃあ」

タールク、両手をあげて、

タールク「降参」

降参を宣言。手放したレイピアが床に

落ちる。

ジャンキサス「そこまで！ タールクの降参により……ニユンリンの勝利とする！」

高台から宣言するジャンキサス。

ルチェリールタ「やった……！」

ルチェリールタ、客席から見ている。

ニユンリン、タールクに絡みついた糸をほどく。

タールク「あなたから迷いが消えたように見えた。これも、ルチェリールタさんの知恵か？」

ニユンリン「はい……！」

ニユンリン、さわやかな笑顔になって

いる。

○タールク宅前

ルチェリールタたち旅の一行と、ヨナ、
タールク、オパピアが集まっている。

オパピア「え、タールク決闘人やめるの？」

タールク「ああ。ニュンリンを見てて、初心
を思い出した。私は、強く優しい騎士にな
りたかったんだ」

タールク、ニュンリンの方を見る。

タールク「ニュンリン。これで君も自由の身。

君がルチェリールタさんと旅ができるのが
うらやましいよ」

ニュンリン、ルチェリールタにぴつ
とくつついている。

タールク「ニュンリン。君ならルチェリール
タさんの役に立てる。ルチェリールタさん
も、お元気で。私は国で騎士として活動し
なければなりませんから」

ルチェリールタ「うん。がんばって」

タールクとルチェリールタ、握手を交わす。

○ 船・個室（夜）

旅の一行にヨナが加わった。一行全員が船の個室にいる。

ニユンリン「えへへ！」

ニユンリン、ルチェリールタにべたべたしている。

ルチェリールタ「近いつてば。でも、これもいいかもね」

ルチェリールタ、まんざらでもなさそう。

ルチェリールタ「で、心愛さん。その犬はなんですか？」

ルチェリールタ、心愛がだっこしている犬に視線を向ける。

心愛「あ、そうじゃ。この子はワウー、ニユンリンが意識不明だった時に夕杜に行ってたんじゃない。これは、特別なマナライトに反

応する犬での中」

心愛とヨナ、それぞれの懐からマナライトを取り出す。

ルチェリールタ「マナライト……あ！　忘れてた！」

ルチェリールタ、懐から青いマナライトを取り出す。

ルチェリールタ、青いマナライトのこ
とを説明。

心愛「なるほどのう」

ルチェリールタ「そういえばヌノ以外王都無
事なんですかね」

ヨナ「ヌノが一番強いから、早めに潰したか
ったんじゃない？　ゲドン族は数が多いし、
このマナライトは役に立つのヨナ」

3人、マナライトを懐にしまう。

ニユンリン「ルチェリールタ、トイレ行こ」

ニユンリン、ルチェリールタに顔を近
づける。

ルチェリールタ「えっ！　ちよちよ……みみ

みんなの前でっ！ 見せつけたいの！？」

ルチェリールタ、焦る。

ニュンリン「さすがにもつかい投獄はされな
いでしょーっ！」

ルチェリールタ「もうっ……」

ルチェリールタ、頬を赤らめる。

ルチェリールタとニュンリン、部屋を

出る。

シャーニューニダ「いいのか、これで？」

芽里「人それぞれです」

チビィ「同性異種族とか、イレギュラーすぎる
だろ！ なんだこれ」

○巨大飛行物体・司令室

ゲドーナ、椅子に座りながら端末で通

話している。

ゲドーナ「そう、失敗したの」

ヒュールの声「申し訳ありません、奴らはお
もいのほか、強固な結束のようです。投獄
中に機械を暴走させてみましたが、効果は

ありませんでした」

ゲドーナ「いいわ、ヒュールは使えるもの」

○ 船・個室（夜）

ヒュール、端末を持って通話している。

ヒュール「ありがとうございます。もう少しで、奴らの重要な情報を掴めそうなので、が……はい、はい。それではまた」

ヒュール、通話を切る。

ヒュール「あの名前、ゼラムの――」

少しの間。

ヒュール「次は、あの情報を使ってみるとするか……」

ヒュール、ニヤリと笑う。